

であり今後も作成し検討していく必要があると考えられた。

4) 新潟大学医学部附属病院精神科における児童外来の現状

鈴木由紀子(新潟大学
保健管理センター)
仲丸 恵(五日町病院)
小柳 観喜(新潟県立療養所悠久荘)
橋本 道子(日本赤十字長岡病院)
増澤 菜生(新潟大学教育人間科学部
障害児研究科)

少子化が進み、子供の数が減少してきている一方で、心を病む子供の数は年々増え続けている。また激変する社会の中で子供たちの呈する問題も多様化し、複雑化してきているように思う。そのような状況に我々精神科医は対応しきれているのであろうか。

新潟大学医学部附属病院精神科児童外来は昭和48年に開設された。現在、児童外来では週1回、15歳以下を対象として診療を行っている。今回の調査対象は、1997年1月から2000年8月までの3年8ヶ月間に当院精神科外来を初診した15歳以下の患者、計201名(男性77名、女性124名)で、男女比は1:1.6であった。初診時診断をDSM-IV診断カテゴリー別に分類すると、幼児期、小児期または青年期に初めて診断される障害20%、摂食障害17%、適応障害15%、身体表現性障害13%となった。昨年報告された当科の全外来初診患者の統計では気分障害23.7%、分裂病13.8%であり、それと比較すると成人と小児とはかなり疾患分布が異なることがわかった。主訴別では「不登校」が一番多く、小学校高学年、中学生を中心に85例みられた。そのうちの4割以上が身体的愁訴を伴う「特定不能の適応障害」、「鑑別不能型身体表現性障害」と診断され、腹痛や頭痛などの身体的訴えを理由に学校へ行けず、外来を初診した子供たちであった。学校や家庭でのストレスを言語化できずに、身体化することで防衛している子供たちの様子が伺えた。また小児科、内科など他科からの紹介が半数以上あり、身体症状を呈する症例や摂食障害が多いことも考え合わせると、今後もこうした身体科との連携が重要になってくると思われる。転帰別では、初診のみや短期間の治療で終結に至る一群と長期にわたり治療継続を要する一群とに大きく分かれた。当外来は診断確定あるいは助言や交通整理的役割を期待される一方で、十分な時間や深い関わりを要する専門的治療や養育的役割なども求められているこ

とがわかった。

児童・思春期はその年代そのものが変化に富み、その時期に生じる精神障害も多種多様である。その幅広い疾患を十分扱うには、医師、心理士、ケースワーカー等様々な職種間の連携が必要であり、家族や学校の協力も不可欠である。そのような治療体制を組むには、現在の当児童外来は医師5人が一人何役もこなしている状態で、「児童外来」と看板を揚げながらも十分機能しておらず、ニーズに応えきれていないのが現状である。新潟県内では児童相談所やまぐみ学園が中心となって就学前、小学校低学年の精神障害、発達障害、虐待などに取り組んでいる。また悠久荘では専門病棟や併設の教育機関をバックに、医療、療育、教育といった多方面から幅広い疾患についてアプローチを試みている。それぞれ特色を生かした治療を行っているが、大学病院内での児童精神科医療の窓口として、当外来がどのような役割を担っていくのか、独自性を見出ししていくことが今後の課題になるだろう。

5) 柏崎厚生病院における精神科急性期治療病棟の現状——第2報

山手 威人・柳 日出彦(立川メディカルセン
ター 柏崎厚生病院)
坂井 乃美・直井 孝二(精神科)
吉浜 淳・松田ひろし
山田 治(東京大学
精神医学)
結城 麻奈・飯森真喜雄(東京医科大学
精神医学)

平成11年2月1日より当院では精神科急性期治療病棟26床をスタートし、1年8か月を経た。昨年その現状についてこの会で発表したが、今回その後の、急性期治療病棟の経過と現状を、昨年度とその後1年間に分けて比較をし、またその課題と問題点について検討した。

試行期間を含んだ平成10年10月から平成11年9月までと、平成11年10月から平成12年8月までに、当病棟に入院された患者を対象とした。

1. 入院患者の推移
2. 入院形態 任意入院の増加、医療保護入院の減少が認められた。
3. 入院、転入患者の合計数 病床回転率 増加が認められた。
4. 入院、転入患者の疾患別人数 退院、転出患者の疾患別人数 入院 退院の両方とも分裂病患者の増加が認められた。